後雕
奇談

自來也後編 五

へ13
3329
11

門へ
3329
11

報仇奇談自來也説話後編卷之五

武江　感和亭鬼武著

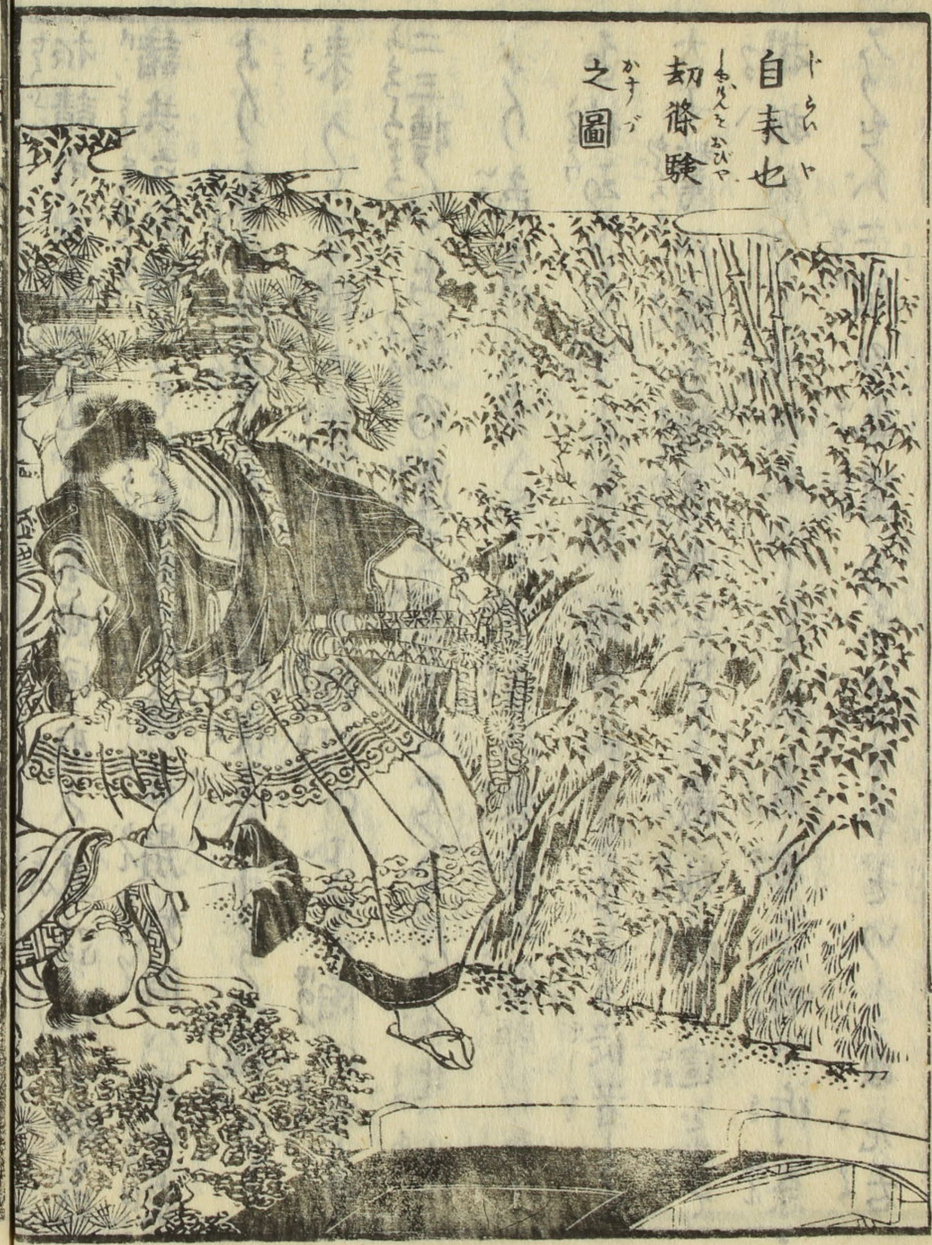
大正十年八月廿九日寄贈
本大學圖書部

石堂之息女玉琴奇病併自来也ニ丁石堂家入込条

さるぢ自来也の小唄嘆芽八仁木の家隷と詐り結内のぶこを
とり持せ石堂家へ入込るまぶ盗賊とハちがひ食慾のるおそ
小賊共ゝ意を眼く館の動静を窺々るふ此程息女玉琴
半点病氣の由聞ふわぶ特と仁木家より ゝ婚姻の日を
ろ〻と急ぐ乃振を述立帰り自来也ふ斯と ゝ ゝ
自来也仰曜夫ふつゝく呼一計ありとなるも石堂家れ
動静を窺せるる去るるふ石堂家ゝ仁木家より

婚姻とり急ぐ越るれバ一日も老早玉琴の病氣平愈
あらんを願ふ處ふ庭訓頃日ハ息女玉琴乃象いみと
ゆ〳〵く二個ふるり飲食坐臥俱ふ差人らとあく何れら
実の玉琴なるを不分醫術祈禱手を尽せども驗なく
持余にとう〳〵犬ふ入らる小賊とり自来也へ告知えぐれ
バ仕様し〳〵とり歌之助を近跟這回ハ汝を用るの期至れバ
早ふ従ひ如斯〳〵せよと謀を示〳〵折をとり廣ふ
石堂家あくハ玉琴の吳病ふ驚き名僧名醫を捜し来わ
當時縁倉雪の下ふ遊りある嚴妙院とく法修驗
こそ斯る祈禱ふ妙ふ〳〵と同へくれハ太早使者を走せ

招請ある支疾も自来也同取く其路程ふ歌之助
諸共立出待こうも不知那終験者嚴妙院ハ石堂家
より急の使者ふ乞せさ疾夜ふ入〳〵轎ふく
来うる傍の萩陰とり挑灯のとく焔の九くせ
二三遍び出轎乃遠を回るとく乃へくほぐ其中
より色青う〳〵る男女の容象二個顕れ我〳〵
を袴ふくと乎ふまぐそ轎を如〳〵くる従者ども
大ふ驚ふ轎を捨蛍逃出せど嚴妙院も這を看て
揺振ふぐ〳〵珠数ふ〳〵くみ真言を唱へ祈念
ようせバ二個の幽霊あふ苦〳〵やとい〳〵る左右



自妻也
劫掠験
之圖

より嚴姉院ゑ必至と拘跟そぐれべ呼と計ゑ嚴姉院ハ氣絶做しゝる其ものゑ那燔も逝靈を忽ち何地へゝ消失あゝりゑ人もあゝされば自来也歌之助倶ゑ木紅より立出嚴姉院の著類を剥取自来也ハ行足を擡く壹一踏ゑ嚴姉院を踏殺し死骸ハ傍の萩くゝうち込歌之助と低言合石堂の館をさゝく急行皆是自来也の天術こそ怪しゝれ偖且石堂家あゝハ息女玉琴ゑ病ゑ犯ま醫術の験もあゝざるゆへ終嚴姉院を憑遺せば若早来ようゝと待處へ嚴姉院と披露さゝ

ゝゑ到る自来也ハ修験の躰ゑ身を変じ歌之助を示唆と做しゝく迚連入ゝまゝ夫ゝの吏職立出扶桜あゝく后奥深く招ゝ入ゝし動静を説話ゑ身の行法をゝて那天病を退げゑ嚴姉とあゝり久ゝはゆへ自来也ハ得先姫君の容躰を窺ひ申さんとて奥へ斯くと通しゝる侍女どもゝあゝく自来也を案内做しゝ郊の森所へ伴ひ次の間ゑ抵ゝ、ある変へ万里野破六ゑ助の妻環立出玉琴の天病の動静を語り居間の異風を延退れハいと美麗ある息女二個同じゝ象あゝく褥の上ゑ坐しゝゑと自来也ハ得尺届幣帛押立珠数ゑ揉擂しゝ

程祈念あり〜て右手を叩き結び印を唱れば今迄
二個ありて玉琴のあるを懼〜と呼びて一個の衆
猶失なべきに環を始終意を跟此光景を観て
自来也いと〜今一個の容象失せりといへども今霄
の中は某這所館を停りあるべきを覚束なく侍る
不苦は侍次を成とも今霄某直宿做〜て祈念
不怠を明日より姫君の吳病平愈疑ひあるべうべとも
みぞ環いと〜く実も妙なる貴僧の行力を以て急験を
看ずとも尚今霄は鼓を停祈念を憑まるべし去
耶うと此處は婦人のくるとび表の大坐を拂へふはり

支あ〜ばとれく板さゃんと僕侍女の案内をく別間へ
誘せさるく餐應あり〜る處へ當家の長〜る方里野破广
之助保義立出対面做〜て始て見糸の礼を伸べて右塾
面鮮を観るを乎は不見定ども覚ある顔をを
意を收先寛く休息あれと扶抜なく考る破广助
乞窩を一物假粧このと推量〜てぞ奥を入る此を朝妻
歌を助は小厮と糸く自来也と偲を入迄小房室をあり
退屈のあり大坐の中を其所此所と見巡る容象を
多くの女中洹城を茲を看く顔色醜美亢の風俗否身
なるを上於矣想ひ琴咲を歌を助は已を為あるんと

歌こ女お
とくすび
蔦魂畳

横眼を流目ふ〳〵く色情を含ませ表慰と女共小手招
くゝどせるふ浮れ歌之助ハ縁端ふ足ハ立て延上りゝやる
柏子ふ高ち縁板踏外し廣庭へ滑び陷るとく柱ふ頭を
打跟髪解く大童の象とあるとゝ衆皆絶倒して逃入るあぞ
歌之助も又面目やありゝん頭を抱へて元の小房室へ走
帰るゝ自来也も大坐ふあり〳〵く遥ふ此躰を看やりまく
のや落魂尽きとゝと苦咲してありゝる處へ吏職立替入
替食應あり姫の奇病も貴僧の行力ふく疾快方の動静と
くへ待れバゝくとも今霄ハ直宿憑ヤよしふて夜更るまぐ疑侍
權く懇ふへと衆皆大坐を延取し跡ふゝ自来也書
一個前後を見廻し一時刻を考ふるふ疾三更の時計の
数館も静ふ人〳〵も森入端ふ折こそよりられと暗ふ
携へゝる腰剣取出し頭巾衣を脱捨る肌ふハ着込小手
肩當奥を眼掛く立上り大願成就の期至れりと一個
笑〳〵く晴眼の森處を志し差足抜足忍入る動静ふ
窺ふ破亢之助相圖の呼子吹鳴せバ妻の環ハ桙待春
身怪の出立雑刀小脇ふ抱込ぐ姫の森所を立出るを
破亢之助低言いへく〳〵く先刻申合せ〳〵く今霄八込
終験者こゝて各貞ふ盗賊自来也ゝれバ預ふふ俳ひ擒
ふ做んと口〳〵ハ力士を砂く取囲ハ虫の扒出る處もあ〳〵汝々

姫君の寓處を固免あるべく相圖せよ予ハ這よゝ君の
寓所を直宿せんと奥の殿へと急行

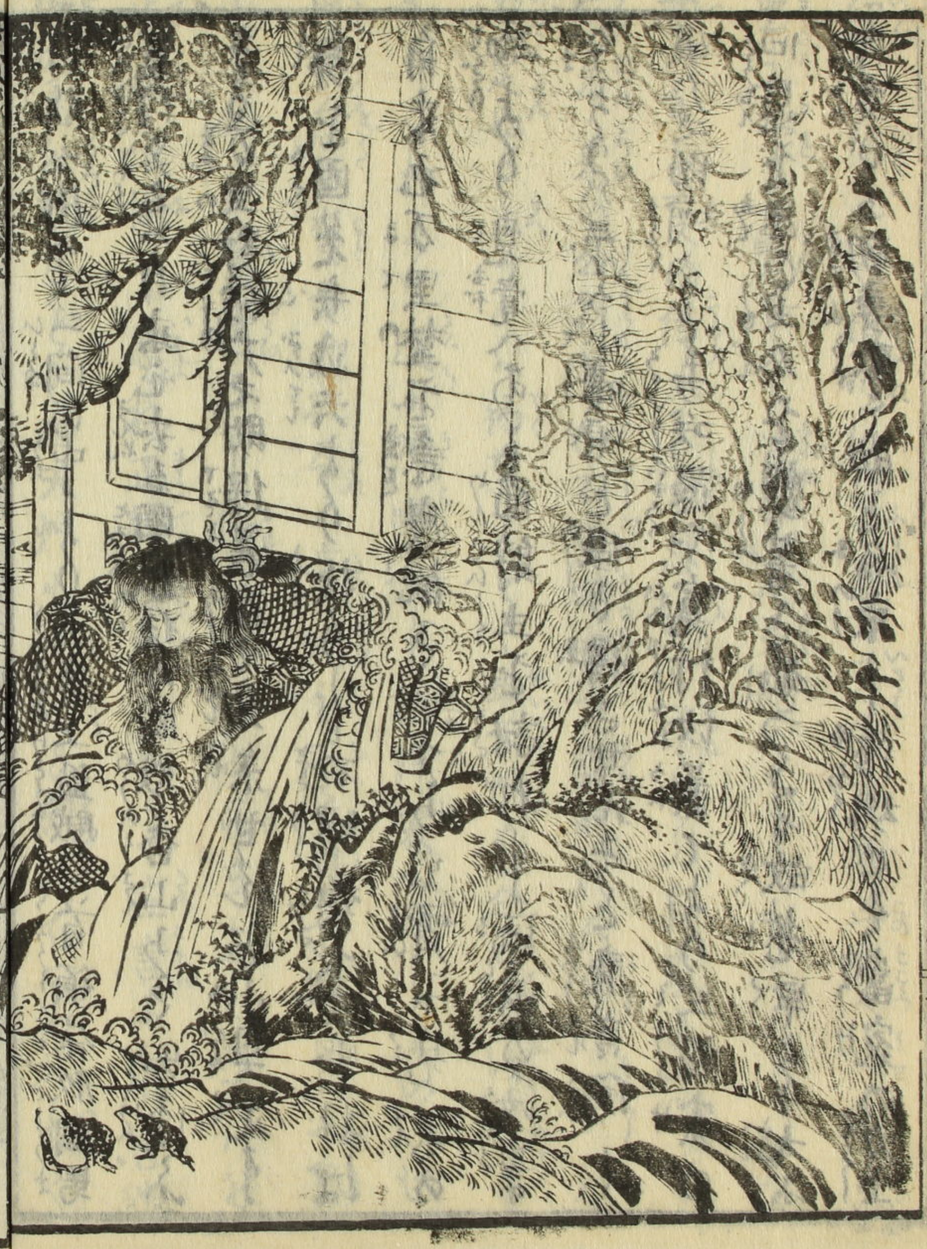
自来也歌期併自来石由来条

尚更渡る夜半の風廣庭前の池の邊ゑ連く音を唱殺交
の性いと寂莫やり水の流を堰ゝる樋の口より生首喰へ
無刀提頭主ゝる盗賊自来也一個言ゝて天を仰ぎ古も
三好長慈公過けゝる頃三浦岬の海上ゑく汚憑あり石堂
晴昵の死級書今霊魂ゑ備奇なる是ゑく意恨を晴ゑへ某
迚も兼てより石堂家ゑ仇を做ゝ三好家の恥辱を雪ゐ
ちいらせんと偖社這迫盗賊の悪行を挙動ゝゑ軍用
の金を調へ石堂と一軍ゑさゝやと乞挑侍ハゝゝゑ習ひ学へ
ゝ忍術ゑく不討今宵晴昵の生首得ゝる歓ゝき大願
成就乞地よゝと天ゑも上る勇の勢ひ何の間ゑハ破亡
之助の差圖ゑ取巻詩寿の組ゑ挑灯松明白日のをく秋
組畳んと取跟を神変奇術の自来也ゑ切立ゝれゝゝ意
退き乗道具ゑて抜止んと弓鳥流の矢玉を槌へ抜ども
射ども所持做ゝる西天竺の奇特ゑく身ゑ
矢玉もあゝざるうち唱ふる呪文ゑ自来也の象ハ失ゝへ
ざれば捕逃さゝと組ゑ共其所よゝ所よと廣庭を尚
奥深く尋行後より亦も顕るゝ自来也口ゑ呪文を唱へ

印を結びて指拵へバ不審や勇侶吉郎は夏へ走来り
累ね戸を呼ぶと覚るゆへ髮地のぐらくまうしーあり
如何する夏の侍のと大息継ぐ暴ぶ自来也いへらく
戸年来の仇敵叶へ石堂晴明を討取れば今ハ某れ
望足ぬる上ハ絡せーどく西天竺を今こそ汝ぬ与る
ありこれより還ぬ帰国ぬ椎津家へ返ーまうせ
忠勤怠る夏ぬうれ戸ハ奇術を以て身を躲せ其身
ぬとりて氣遣ぬーー侍を敵地を疾立去と西天竺を
手渡ーー做ーー急れ正輝疾行と出さ立言ぬ侶吉も
此坊ぬ残りども西天竺も大切と別れてこそ出く

行脚る折ぬ一間の中より大音上盗賊の首領尾形周馬
寛行吳名ハ自来也去る頃越後の国妙香山ぬ逢ふ
そる万里野破亡之助保義改て見糸せんと小具足了
身を固光兵成天より接りーー石螺携へ立出れば
自来也万里塁を急度観るくいうも霄ぬ見糸の
砌より見覚へある面鮎主を討れーー流浪の汝等
今よりハ戸ぬ小嘍喽と做く得させんそと賞言閑く
破亡之助呵ーーと歩咲愚や寛行汝兼てより三好家の
旧恩を思ひ主人を覬著と紙つる故老早より犬ぬ
跟疑ーる朝妻歌ーー助と名乗ーー清魂とそ當家の力士

自來也擊
假真首而
出樋口圖



其二

と唱へる荒山隈五郎時綱と不知や復主人晴明と公得て
討取るる若冠社汝が三浦の海上あく出逢あるる吾川
采男といふ〜りの當家の不奥を家りて山訳下立
と切服做〜きる亡骸を主人晴明の森所ふ入替汝ふ
討せて采男小一の功も省立悪徒あぐるも汝も復忠
義ふ懲らす魂を安く情討取んも武士の本意あら
ざるべ主人の身替采男の首を渡せ〜も汝が義公を
感せ〜侭ら情の計ひぞや晋の豫讓の例を想ひ
怨を晴〜尋常ふ素拙きと呼ふれば自来也
怒の歯怒を做〜計るくと思ひ〜ふ謝れ〜

残念や此上ハ早奇術を以て館の奴原鏖と唱ふる
呪文ふ風吹起り峡雲霞ひ雲中より救夏の騎馬
武者得物を延提破亢之助目掛ふ掛る折ふ跪出ば
歌之助大童ふ待巻締小手拵當ふ着込做〜始め
落魂延暫く勇士の相貌太刀抜かざ〜荒山隈五郎
時綱這ふあり天魔の変化何程の夏あ〜んと吳形
の物ふ討ふ〜る破亢〜助ハ此時と一丸ふ金亀山兵戦天と
祈念る〜那石螺を吹鑵ハ実や遠音ふ響渡り不
思議や救夏の蛇あ〜ふれ吳形の武者ふ扮掛るば
象ふ変〜く木の葉とあり四方へ散く消失ふり自

来也焦燥呪文をとなへ印を結べと這者如何術力尽て
験しなし破亡く助手咲ひ寇早不叶尾形周馬汝が行ふ
蝦蟆の幻術辨財天の加護ふより術尽ぬれば詮なく
邪く一本立の盗賊自来也者共楽を組捕と言の下
より紋麦の組子道しハせ〳〵と捉捕るを丟跟蹤殺切散し
這迫んと自来也ハ腰刻逆手ふ我腹へぐさと突立延
回し一息継く破亡く助ふ望ひ吊古主の旧恩を思ひ
當家ふ恨を報んと年日の願ひ〳〵しふ時分ふ
玉藻姫の婚姻僥倖ひと小賊を入込せ其上ふ吊天
術をなく姫の象を二個と做し且倫験者と詐りて
呉病を退け透を窺晴暇を撃取しと思ふ差ふ計畧
の綱ふ撫り割へ石螺の奇情ふく吊ふ天術の尽ぬるも
這迫做し悪行の報ひ其ふ他手ふ撫るなしと
兼ての願此生害さり邪ぐら天術を差人とも我
一念の術をなく象ハ此侵後世ふ残るべし寂期の
程を看よやとて腰剣抜取喰ふ當吮のくさりを捨切
ふぞ首討取んと隈立亭傍ふ立寄バ一程の赤氣
煙〳〵と立上り眼霞く跟蹤うち周馬の象ハ煙り
ぢく消失く残るく一の石の像人の如くふ立ちく
不審成る光景あり破亡之助感歎なし悪人なぐら

也義公の自来也奇今楽が寂期の言ふ差あく一の
ちゝを残せゝ前代未聞の賊徒は首領
其石こそふ生得ふ自来石と号べゝと言ゝ
今も縁倉の扇ヶ谷の自来石固縁えと称ゝ也
ゝは

荒山隈五郎捕賊徒 併 勇侶吉郎天眼坊等

自来也後吊条

斯ゝさゝも名を得ゝ盗賊自来也亡失ゝうふ残るふ
賊捕捕んと方里野破ゝ助の差図を更羅ゝ案内知り
寄る荒山隈五郎時綱組ふ延連上総國相模國の道ふ

徘徊做ゝ自来也の小嘍喽共の左所を貪義ゝ勇を
揮ゝ残ゝ捕縁倉へ延連来る折ゝ三浦岬ふ
立寄滾島金吾ふ逢て吾川采男の寂期の動静を
詩ゝ偵ゝ吉ゝ蛟の洞八ふ金子を奪れんとして
難ふ逢ゝ時金吾を救ひゝ浪士も吊ゝと説話
采男行代ゝ衣の後吊ひ得させと金五拾西ふのまば
滾島金吾も大ふふ歎ゝ且隈五郎の志を歓び逗ふ誓
切ゝ墨の衣ふ身を変ゝ采男行代ゝ衣の菩提の
岩ゝ巡回修行ふ出ゝとゝ佐亦自来也亡ゝ変
佐國小別へ侍れば勇沼吉郎妻の義鳥の後とも

自来也さの
自来也之圖

大に歎き悲しび追薦供養不怠天眼坊も這を聞
繰倉に到り傳手を求く那自身石を伏手涙を流し
面向做し其后此邊に引移て尚も年回の仏事執行ひ
る俗勇侶去郎より金を出し一の庵室を建立し
天眼坊を庵主とし〻く自末也の後懇ろで弔ひるるされば
荒山隈五郎盗賊共を残らず搦捕送〻罪に行ひ伝れば
世上穏に旅行人民門戸の鎖を忘れ静謐の御代と欣悦
るるとそ目出たくそれ

自来也説話後遍巻之五大尾

軍書小説類藏板目録　大坂心齋橋通南久寶寺町　伊丹屋善兵衛

源平盛衰記　片假名　廿五冊
後太平記　片假名　廿五冊
殘太平記　同　十二冊
四國軍記　同　十二冊
一名土佐軍記
駿臺雜話　平かな　五冊
續武將感狀記　同　十冊
室鳩巣翁の著述にして仁義の大道を示し
て鬼神の説和漢古今名將勇士の名行を録し治
乱の要術兵法和歌詩文の條説老儒の見あり
聖德太子傳圖會　平かな　六冊
楠正行戰功圖會　平かな　十一冊
畫本西遊全傳　四十冊
太田道灌雄飛録　六冊
繪本玉藻譚　五冊
左衛門大夫太田持資入道道灌三代執政御の後
流て羽谷上杉氏の家臣さ文武の英才き和歌
聯ざる一世の戰功忠義を委くゆゑん
同白狐傳　十冊
一名玉藻譚後編

復讐言岩見英雄録　全部　五十冊

此書三編まで八作者各賛より四編以下廿九冊八一家の手筆にて記せり岩見氏をもて通編結説の主人公とし給水堂の五傑と称する勇士の傳なり　田長盛の賊徒對治天誅立の復讐を主作者の新案を費せり七編八結句にて総計の一部にて八冊をもて一部とす

刀筆青砥傳　八冊　同

叶堂水戯評　孫亭子の原稿を曲亭翁の筆削せり　北条の敵八医人名を剝奪して愛妾花妹を殺し狂も奸夫備三郎を騙りて盗賊と誣告らへて殺さんとせしを青砥藤綱が明断各その罪を照て懲せる仮話姉紫らし

蛋水室の八雲　八冊　同

下野国佐野圓城主佐野の家臣平四郎國龍が忠心遠孫の新平左郎が妖術咲隈を殺し平左郎が忠孝を表面白くものせり

同合邦辻　十冊

同浅艸霊験記　十冊

同金毘羅神霊記　十冊

同誠忠傳　十冊

同孝感傳　十冊

同顕勇録　十冊

同奇縁傳　十冊

同忠孝美善録　十冊

同伊賀越孝勇傳　七冊

三問復讐檀之二葉　六冊

鎌倉年代圖會　五冊　同

新編鎌倉の創業より宗尊親王の下向まで拾て将軍家五代の間の財事を表くまるも

鎌倉大樹家譜　五冊　同

宗尊親王鎌倉ふ着所より累世歴職秩西の家雅北條が一門立ひて後醍醐帝天下を平定しまでを載

武蔵坊辨慶異傳　十冊　同

源平世中が水滸傳の面目を撰て変化せる独向ゐれば甚興ある小説なり

大内多々羅軍記　六冊　同

大内義隆の強奢風流より嬖臣相良武任が佞智浪人服部を罪ふ陥れ妻を君に進

ひるる妖婦生駒の方がり陶尾張守賜賞が
大悪逆なれど正史に出入せる面白記録史なり

近江縣物語　五冊

花山院の門代なるとき坂上梅丸が全傳
盗賊為系保輔斎明が残暴　橋安世が
女園生が奥操安世が殯常くが非慾膳所の
梅丸　敦光卿の詔　賊徒征伐
の大将軍為系保昌を助けて賊を平らげ絶ふ
近江掃ふ進み生の父母に逢　但結ふてその
文の郷なるを関して知るべし

昔語松虫墳　六冊

遥武の頃清水河内の国の勇士野田太郎清系氏安
武勇婦桂子なる徒母祇が奸淫安井隼太が隙
悪妻田勝美義里なる世田の和尚本清係八が妻
松女が狂死木清係太郎が非嘲の遊女柏木が孝心
松虫墳経塚などの由来を記す

奥州小白田原の長藤清三郎右衛門といふもの
千田民部を撃殺して松田伊織を斬せ一子松
田夫婦と民部が孫民孫が義死老母が寃魂
民部が庶子民五郎と小童を憑て復讐
させしまを編り

社寺霊験　二葉の梅　六冊

賊茶の盗賊池上七九郎が悪悪のなり孝子
蜀かと上田茅之二郎が復讐の小説にて悪
年岩見三之亟義侠の老人を敬称なるなど
を綴りしなり

報恩琉球　十かえの花　六冊

建久年中に出現の山縣の郷士常盤井内記泰
兼則が二男隼二郎美久が仙郷に誘れて教を受
け後年諸者を助けて父の仇を山伏山を討ちて
仙女去来見と昇天せる奇談奇なるべし

今昔二牧絵帙紙　六冊

天文の頃播磨国三木の城主別所長宗の部将
菴崎兵部夫妻女子ありて多年孤山亀松なる
遠原勇蔵なる瓶松三郎左衛門が奸悪まで高
村の俳優なる義亀なるを紹介して爽あり

新田神霊　忠孝貞婦傳　六冊

大庭伊織信隆八幡田殿右衛門が落計に中ら
て自害し妻の里見と家臣の田野助が貞烈
忠勇なる寃を雪ぐ

獲雠言千丈松　七冊

近江の土松井逸尚浪人篠村大義が敵殺
れ千茅両人多年東家を索ひ青柳佐市
友くもが阿波の篠村にて忠と逢ひ

忠孝人龍傳　五冊

外傳　弥生佐久羅　六冊

摂州の良民恩地左近が男弥生なる佐久羅八
佐久羅庫が狂死を子孫二郎が胆勇敵者の
奴を除く又池田の里なる福富が女児句なる奇
遇松平軍を駆逐秋山大膳が猛威八尾一雷
童丸が賊士清八郎のなる脚をのべる

新話　花標因縁車　五冊

小鄭半兵衛小金と義盗を作り色男
と遊女殺害の常念法師が左手の瘤の因縁を
経る

玉搔頭　五冊

三光の獅のなを主として話説して上野の郷
高井の武士の義侠の意と再会せん
と上方に出て百方に挽抗して三百貫両の金
を奪ひ盗賊四郎を跟

弘前市立図書館

[illegible]前の士人東條図書幼年にして父助を失ひ仇山中壮二郎を年久しく伺ひ探り後[illegible]和州郡山にて復讐せし事実を録して孝常の偉奇孝徴の美あり

南部小栗忠孝記　五冊

歌討

奥州南部の士竹内新吾同藩の新参の士小栗兄平を待ち窺ひ人をして討殺させ小栗が僕長助清水を使嗾をさそり得て阿波国に赴き主の妻子に告知せて小栗万二郎に憑く父の仇を報せし事実あり

長崎聞見録　五冊

理斎随筆　六冊

和漢の雑事何れも珍書にして稗[illegible]益[illegible]

金屋金五郎全傳　五冊

浅草堀江の市人金五郎が風儀あり義侠南妓額の小三が情実の縁をむすび死[illegible]牛込清左衛門が[illegible]性の可哀き後に生[illegible]

輪廻物語　五冊

安倍仲麻呂右大臣が唐土に渡り安倍[illegible]蓬莱[illegible]聴明[illegible]海[illegible]悪く俗[illegible]

風流茶人氣質　五冊

東西両本願寺来由

繪本石山軍記

初編十冊出版
二編十冊嗣刻

土屋正義編述　松川半山画

此書は本願寺源鸞より第八代蓮如上人自ら聖法を子の宗教を業とし教化を[illegible]の[illegible]内石山寺堂を[illegible]創[illegible]より第十一代顕如上人の世に到り織田信長此地の要害を[illegible]本願寺を攻[illegible]城郭を[illegible]如上人と十余年の義戦[illegible]本願寺の[illegible]織田の大軍[illegible]討[illegible]攻[illegible]我国豊臣秀吉九字の名号の[illegible]の英智[illegible]と決して小[illegible]の義[illegible]川に入れ[illegible]教[illegible]上人[illegible]山[illegible]球[illegible]紀州[illegible]森[illegible]望[illegible]信長[illegible]

繡像復讐石見英雄録

全部五十冊

南海 玉簾主人 編輯

浪花 一蝶斎歌川芳梅 画

○初編 京師人作 ○二編 玉簾主人嗣著 ○三編 京湯子綱著 ○第四輯以下作者一家

永禄天正の頃、流れ者名嶋の浪士岩見重太郎橘種季が生まれより武者修行セー、世の義功大蛇の害を除き、若縄の妖を殺めー、勇威を張め渡る天の擂立おのー廣際成敗大川水三人の大獣を撃て以兄の怨恨を晴し、終に室町殿に奉仕て任官ー、終に水王水王より敬愛れる事間る事堅く、孝女新月ホゴタ給ー、薫の五離と称する勇士の列伝霊猿恩魚の怪談ホ五輯ありハ益入佳境新話あり

浪花書肆

前川善兵衛藏

出版人

大阪府下南久寶寺町四丁目

前川善兵衛